

第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

小学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

「尊い」

神奈川県
湘南ゼミナール センター南教室
小学6年 大嶋 英敬

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

僕が初めてセミの羽化を見たのは小学一年生の夏のキャンプの夜のことだった。

夜の探検をしていた時、父が「ここを見てごらん。」と言って指を差したのは、木によじ登ってじつとしていた、殻をかぶったセミの幼虫だった。

まだその時は、僕にとって何百匹、何千匹いるセミの一匹でしかなかった。

「こんなにかたい殻、本当に自分で破れるのかな。」

「目がついている。」

「からだが白いね。」

「お腹と殻が一本の糸でつながっているよ。」

「がんばれ、がんばれ。」

色々な言葉をかけ続けていた僕は、セミが半分からだを出したあたりからは何も言わず、ただただじつと見ていた。

セミがからだをすべて出した時、透き通るような背中とうす黄緑色の羽を見て心から感動したのを今でも覚えている。そして一緒に見ていた父のひと言、「尊いね。」という言葉と同じくらいはつきりと覚えている。尊い生命、尊い価値、尊い感動、それらをひっくり返して表現した言葉だったのだろう。僕はその瞬間、きちんとした意味がわからなくても目の前にあるセミの神秘的な姿や時間、生命力が「尊い」に値すると心に刻んだのだと思う。

セミはおよそ七年もの間、土の中で成長している。やっと地上に出て羽化できたとしても、約一週間から十日程の命だと言われている。しかも羽化は命がけでおこなわれていた。あれから五年、僕は羽化できずに死んでいたセミの幼虫を何匹も見つめた。穴から出て木までたどり着けなかったり、羽化の途中で死んだり、羽化してもやっと飛び立ったセミが空中で鳥に食べられたりしたのを見た。

僕はセミを通して命の尊さを知った。今、羽化したあとの殻でさえも尊く感じる。それまでの気持ちとは全くちがう。そしてセミを尊く感じた時から、どんな生き物も植物も一生懸命に生きているんだと感じるようになった。

「尊い」とは、神聖・きわめて価値が高い・非常に貴重・大切にすべきもの、これらの意味を含んでいる。日常的に使う言葉ではないけれど、自分の感じ方や心のあり方で使える言葉だと思う。僕にとって貴重な経験と忘れられない言葉となった。